

UNZEN

The Heisei Eruption: through Sunamori Katsumi and Mitsuyuki Toyohito
—— 「平成の島原大変」：砂守勝巳と満行豊人をめぐって

大 地 と 火 山、
災 害 と 表 現、
記 憶 と 伝 承、



砂守勝巳〈雲仙、長崎〉より 1993-95年
©Sunamori Media Archives

[会期] 2022年6月3日(金) - 6月18日(土)

[会場] 多摩美術大学 八王子キャンパス アートテークギャラリー 2F

[本展のポイント]

■多摩美術大学芸術人類学研究所が研究成果報告として主催企画する展覧会。今回は研究所所員 榎木野衣(美術評論)の監修のもと、戦後初の大規模火山災害として知られる雲仙・普賢岳大火砕流をテーマに「災害と美術」について考えます。

■1991年に大火砕流を起こした長崎県、島原半島の火山、雲仙・普賢岳による数年にも及ぶ複合的な被害は、現在私たちが直面している「災害の世紀」の到来を予見していたかのように思えます。本展では1792年の「寛政の島原大変」に対し「平成の島原大変」と呼ばれる自然災害に焦点を当て、これに取り組んだ二人の表現者——砂守勝巳と満行豊人——が残した写真と絵画を中心にをご紹介します。

■展覧会タイトルの「UNZEN」は、芸術表現と歴史・地理・地学の知見とともに、記憶の継承や防災的側面を総称したものです。美術大学がなす「美術展」というかたちで、芸術人類学的な見地から「災害と表現」という新たな次元へと迫ります。

■「災害の世紀」となりつつある21世紀に生きる私たちが、さまざまな表現の痕跡を通して、過去の災害を生き抜いた人びとの想像力に触れながら、新たな記憶の継承のありかたを模索していきます。



展示構成

本展は「平成の島原大変」を導きとして、「自然災害と芸術表現の連動性」と「表現による記憶と伝承」について、4つのセクションに分けて紹介します。

1 砂守勝巳と満行豊人

「平成の島原大変」にそれぞれの立場で向きあった二人の表現者、砂守勝巳(1951-2009)と満行豊人(1937-)の作品から自然災害と芸術表現の関係をみていきます。全く異なる経歴をもつ両者の表現は、91年の大火砕流の発生と被害を伝えるだけでなく、噴火前後数年にも及ぶ風景の記録とも言えます。それらは雲仙・普賢岳の噴火が「複合災害」であることを私たちに伝え、さらには自然災害に対する人間の無力さや「土地の力」を映し出す記憶の集積であることを語りかけます。



満行豊人《'93.9.5 眉山、天狗山からの眺望》
2011-2021年 作家蔵



災害資料(三輪車)
雲仙岳災害記念館蔵 ©Sunamori Kazura

2 災害資料

災害の記憶の忘却と共有のあいだにある矛盾をいかに克服していくのか。残されたモノを事後の遺物ではなく、「事前」のモノとしていかに生々しく実感するか。このセクションでは、客観的なモノとしての資料・史料を、個人の表現としての絵画や写真などの作品を同じ地平で見えてみることを試みます。それは資料という概念自体を考え直すと同時に災害へのこれまでとは異なる接し方を発見するヒントになるかもしれません。



災害資料(学習机)
かどわき歴史災害記念館蔵 ©Sunamori Kazura

3 定点

普段は立ち寄ることのできない、雲仙・普賢岳を見渡す丘陵地の一角に立っている三角すい、「定点」。ここは91年に起きた大火砕流発生時に、できるだけ好条件で噴火の様子を撮影しようと取材のために陣取られていた場所を示します。定点には大火砕流が流れ込み、多くの犠牲者が出たことは、この三角すいが単なる目印ではなく、出来事を後に伝えるためのモニュメントとしての役割も担っています。展示では、その設計から現在にいたる過程をたどりながら、私たちがもつ「モニュメント」の概念を再考します。



「定点」 砂守勝巳撮影
2004年 ©Sunamori Media Archives

4 寛政の島原大変

雲仙・普賢岳大噴火を過去のことではなく、未来に起こりうる可能性としてとらえるために、災害の被害と記憶を歴史的パースペクティブで考えてみます。ここでは1792(寛政4)年の大噴火に遡って、当時の噴火を体験した人びとが残した記録を想像力の発露として考えてみます。通常は資料として扱われる絵画に対して、現代に生きる私たちがどのような実感を持ち、「未来への想像」としてとらえることができるのか。自らの体験をなんらかの方法で後代に残したいという普遍的な感情を、過去の表現から現在、そして未来へとつなぎます。



ポスター「復興へ語りあおう市民集会!」
1992年 松下英爾蔵



作家紹介

砂守勝巳 Sunamori Katsumi 1951–2009

沖縄本島生まれ。奄美大島で少年時代を過ごし、15歳で大阪へ移住。プロボクサーを経て写真家となる。1975年、大阪写真専門学校を卒業後、主に写真週刊誌を中心に活動する。雲仙・普賢岳噴火災害の被災地を撮影した連作「黙示の町」を発表（銀座／大阪ニコソロン、1995年）。写真集『漂う島とまる水』（クレオ、1995年）で第15回土門拳賞、第46回日本写真協会新人賞受賞。2009年、胃がんにより57歳で死去。娘である砂守かずらが作品を継承し、近年は「黙示する風景」（原爆の凶丸木美術館、2020年）、「黙示の町」（長崎県島原市「まちの寄り処森岳」、2021年）ほか、数々の写真展を開催。



砂守勝巳〈雲仙、長崎〉より 島原市中安徳町
1993–95年 ©Sunamori Media Archives



満行豊人《雲仙・普賢岳噴火災害の爪痕》より
2011–2021年 作家蔵

満行豊人 Mitsuyuki Toyohito 1937–

長崎県平戸生まれ。駒澤大学文学部地理学科卒業後、対馬で中学校教師となる。県立島原農業高校、県立有馬商業高校などで地理を担当。1990年の雲仙・普賢岳噴火を機に、噴火による日々の山の変化を撮影・記録し始める。定年退職後、噴火災害の記憶を後世に伝えるため、雲仙岳災害記念館で「語り部ボランティア」を務める傍ら、記録写真を元に水彩画を制作。雲仙岳災害記念館企画展「未来へとどける噴火絵はがき展」（2011年）、「噴火絵はがき展」（2015年）、噴火災害から30年を迎えた2021年には同館企画展「あの時を、振り返る」に出品。

関連イベント

●朗読「雲仙・普賢岳噴火災害によせる朗読二題」動画配信

日時：6月10日（金）より配信予定

配信：<https://www.youtube.com/user/tamabilAA/videos>

（芸術人類学研究所 YouTube チャンネル）

作・朗読：内嶋善之助（島原市・舞台作家）

題目：「普賢岳 diary」より、「朗読詩 アンタレスの涙」より

●シンポジウム「表現と記録、記憶の継承 UNZENからはじめる」

日時：6月17日（金）14:50～16:30（14:20開場）

会場：多摩美術大学（レクチャーCホール）

登壇者：岡村幸宣（原爆の凶丸木美術館学芸員）

笹岡啓子（写真家）

榎木野衣（本展監修、多摩美術大学教授／芸術人類学研究所所員）

砂守かずら（砂守メディアアーカイヴス代表）

定員：先着80名程度

参加方法：先着整理券制。当日13:00より展示会場入口付近にて整理券を配布します。

※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

開催概要

展覧会名	UNZEN — 「平成の島原大変」：砂守勝巳と満行豊人をめぐって
会期	2022年6月3日（金）－6月18日（土）
会場	多摩美術大学 八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー 2F
主催・運営	多摩美術大学芸術人類学研究所
監修	榎木野衣（芸術人類学研究所所員）
コレクション協力	砂守かずら（砂守メディアアーカイヴズ代表）
開館時間	10:00－17:00
休館日	日曜日
アクセス	

JR 横浜線・京王相模原線橋本駅北口から神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」で約 8 分

JR 八王子駅南口から京王バス「多摩美術大学行」で約 20 分

路線バス利用案内などの詳細は大学ウェブサイトの「交通アクセス」
(<https://www.tamabi.ac.jp/access/>) をご覧ください。

※学内に一般用の駐車場はありません。お車での来場はご遠慮ください。



観覧料	無料
お問い合わせ	042-679-5697（多摩美術大学芸術人類学研究所）
URL	http://www.tamabi.ac.jp
Twitter	@IAA_Tamabi

報道関係のお問い合わせ

多摩美術大学 芸術人類学研究所（IAA）

tel: 042-679-5697 fax: 042-679-5698 e-mail: iaa_info@tamabi.ac.jp